

---

# ラピュタ効果と夏の夕暮れ

仙人掌

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ラピユタ効果と夏の夕暮れ

### 【Nコード】

N59870

### 【作者名】

仙人掌

### 【あらすじ】

良い小説や漫画、アニメ、映画、ドラマを見た後に憂鬱になるとはありますか？

文庫本をわざと音を立てるようにして閉じると、それをスイッチとしてセミの鳴き声がかましく響いた。

窓の外を見るともう日が沈みかかっている夕日がまぶしい。

六畳間で、壁側に顔を向けて寝っ転がっている状態から半回転。

「はぁ・・・」

中々に面白い小説だった。

主人公の少女が色々な夢の中を渡り歩く話なのだが、表現の巧みさに脱帽せざるを得ない。

情景が次々と変わっているのに連続性を保っていたり、少し前の記憶がぼやけて良く思い出せなかったりする夢独特の雰囲気を手く描写していた。

2

「ため息なんかついてどうしたんだい？」

僕からちゃぶ台を挟んで対角線上に反対側、黒髪の少女が問いかけてきた。

「というか、僕の彼女だ。」

「ちゃぶ台の足が邪魔をして良く見えないけど、自慢のロングヘアーが畳の上に乱れている。」

「彼女は先程までの僕と同じように壁の方を向きながらねっ転がって、気だるそう漫画をめくっていた。」

「作り物のような美しい姿の少女が夕日で赤く染まっている、というシチュエーションと実際の行動がちくはぐでおかしい。」

「良い小説を読んだ後だから余韻浸っている、というか鬱のような」

気持ちなんだ」

「成る程、ラピユタ効果か」

「何それ」

僕は地を這ったまま畳の上を進む。

窓まで到達すると、その横の柱にもたれかかって座った。バラリ、と彼女は漫画を一ページ捲ってから話を続ける。

「ジブリの天空の城ラピユタを見た後のような現実に取り残される感、とでも言えばいいかな」

どこかの漫画の作者が同じことを言っていた気がする。

ただラピユタ効果なんて言葉は聞いたことがない。

「その言葉、今作った？」と聞くと、彼女は「んあー」とか曖昧な返事をした。

会話をしても僕の意識はまだ本の中にあるようで、頭で考えたことが取捨選択無しに口をつく。

「本の世界がいつまでも続けば……とか思わない？」

「いくら噛んでも味がなくならないガムみたいなフレーズだね。両方とも結局のところ終わりがあるけど」

バラリ、と彼女はまたページを捲る。

「せめて自分が死ぬまで位の長さの物語なら十分だよ」

「ガムが？」

「物語が」

汗を袖でぬぐう。

本が終わらなければこんな蒸し暑い現実に帰ってくる必要は無いのに。

いい加減扇風機無しで生活するのは限界だ。

「そんなに現実が嫌かい？私は君の事をこんなにも愛しているのに」

数秒の沈黙の後、帰ってきたのは芝居がかったノロケだった。

僕は恥ずかしさを誤魔化そうとしてため息を吐き出した。

「そこまで現実が嫌いなわけじゃないけど・・・とにかく面白い小説とか漫画とかが終わるのは何か嫌だ」

さっきよりも少し長い沈黙。

頭の中で何か考えているのか、それとも僕との会話より自分の漫画を優先したのか。

どうやら前者だったようで彼女はゆっくりと口を開いた。

少し不機嫌なような、秘密を打ち明けるような、告白を強制されているような。

とにかく、ためらいがちに。

そしてそれを隠すようにいたって平坦な声で。

「今の君は他の現実から本の中へ潜ってきた主人公、というのはどうかな？」

少し目を見開いて僕は彼女を見た。

成る程、少しクサいけど彼女らしい考え方だ。

だからと言って読了後や視聴後の憂鬱感　　確かラピユタ効果  
だったか　　が消えるわけではないのだけど。  
でもまあその前向きな姿勢は嫌いじゃない。

僕が思考にふけっていると、ちゃぶ台の向こう側から弱々しい声が  
聞こえてきた。

「あの・・・あんなこと言った後に黙られると恥ずかしいんだが  
・・・」

「ん、ごめんごめん」

凜としたいつもの彼女もいいけど、ふっと見せるこつこつ可愛さは  
とても貴重だ。

ついつい口元が緩んでしまう。

壁側を向いた彼女の表情が見えないことが何より惜しまれる。

「本を読み終わったなら適当に夕飯の準備をしてくれ」

彼女の方は気配で僕がにやけているのを感じたらしい。

どこかすねたような口調だ。

「はいはい」

ゆっくりと重い腰を立ち上げる。

ついでに首を傾けてみると、ゴキゴキと良い音が鳴った。

随分長いことうつ伏せで読書してたせいだ。

枕を押し入れから出しておくべきだったかな、といつも通りの反省を  
する。

今のところ僕が枕を使いながら読書したのは、布団を片付け損ね  
たときだけだ。

「面倒だし暑いからそうめんで良い？」

漫画のページを捲ってから「んあー」とだけ返事が返ってきた。和室を出る直前、一瞬立ち止まって漫画を読み続ける彼女のほうを振り返る。

小説の主人公もこんな綺麗な黒いロングヘアだったな

セミの声は頭の中で反響していて、実際に外で鳴いている様には思えなかった。

(後書き)

コメディの短編ばっか書いていたので、初挑戦のシリアス短編です。なので誤字も含めてアドバイ스가あれば是非ともお願いします。勿論感想も大歓迎です。

あと真ん中らへんのラピユタどうこの漫画の作者は銀魂の空知先生です。

自分がその憂鬱を感じたのはラピユタが初めてだったのでかなり共感を覚え、わかりやすい具体例なので使わせていただきました。見たこと無い人と感じたこと無い人はすいません。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5987o/>

---

ラピュタ効果と夏の夕暮れ

2011年10月4日18時56分発行